

原著

日本医学雑誌第二十八卷一號
昭和五十七年一月三十日発行

昭和五十六年十二月八日受付

有田樹林の論文「日本種痘ノ始祖」の紹介と 痘苗活着年の検討

添川正夫

「日本種痘家ノ始祖」は、有田樹林が明治十五年東京医事新誌二二三号（一三一—一六ページ）、二三三号（一六一—一九ページ）に発表した論文である（以下有田論文という）。

有田の発表に先立ち、同年、栃木県の高田春耕は、「種痘三祖ノ記念碑ヲ東京ニ建設センコトヲ議ス」と題する一文を発表し、種痘三祖は北条諒斎によればイギリスのジュンナー、支那の邱浩川、日本の桑田立齋となるが、桑田立齋を日本の種痘家の始祖とするには疑問があり、広く教示を仰ぎたいと述べ、これを受けて和歌山県の郭嘉四郎が、嘉永二年の牛痘苗の舶来とその国内伝達について記し、日本における種痘の始祖としては桑田立齋よりも笠原良策を推すべきでないかと発表した⁽³⁾。

高田春耕は再び投稿し⁽⁴⁾、日本における種痘の始祖が誰であるかなお決定をみていないが、『：其事実ヲ探ル其地方ノ人ニ謀ルニ如カスト因テ今茲ニ長崎県下ノ医士諸君ニ質ス抑々和蘭医モンニツギ氏始テ牛痘苗ヲ載セテ崎陽ニ至リシハ今ヲ距ル一三十四年前即チ嘉永二年ナリ之ヲ邈焉ノ古代ト云フヘカラス故ニ崎陽在任ノ諸氏中必ラス牛痘伝来ノ顛末ヲ見聞セシ先輩ノアルナラン若シ之アラハ余カ目下ノ一大急務トスル伝来ノ実ヲ尋ネ認メテ一篇ノ弁ヲ惜ムナク共ニ医学ノ進歩ヲ図リ共ニ忠功ヲ建テンコトヲ期セラレヨ：』と強く訴えるところがあった。一方、青森県の菊地武文は、松前福山の中川五郎治を以て本邦種痘家の嚆矢とするも過称でないのではないかと発表した⁽⁵⁾。

有田論文は、これらの発表、なかでも長崎県人に強く呼びかけた高田春耕の一文に応えようとしたものである。

有田論文の要旨

有田樹林は当時医学生であったが、夏季休業中で幸い長崎に居り長崎の医師、諸老、さらに弘化・嘉永の頃公務にあつていた諸官吏に精力的に会つて調査した結果、吉雄圭齋こそわが国種痘家の始祖とすべき方であると発表したのである。

その論拠とみられるところを左に抄出する。

『：嘉永元申歳六月十四日（笠原氏小傳中八月トアルハ恐ク誤リナラン但シ西曆ニ取ル乎）和蘭軍医モンニッキ氏更ニ牛痘膿痂（以来屢々船齋セシモノハ単ニ瓶中ニ蓄ヘシカ嘉永年度ハ瓶ヲ三層ニシ固封スル極テ密ニシテ総計十個タリ其内唯々一個ノミ感應スルヲ得タリト云フ蓋シモンニッキ氏語テ曰ク此回瓶ヲ三重ニシ来ルハ赤道直下ノ地方ヲ經過スルニ由リ其勢力減少シテ著シク感應スルヲ能ハサルヲ以テナリト）ヲ船載シテ来港スルヤ氏（吉雄圭齋氏のこと。著者注）欣悦惜ク能ハス即日其艦ニ至リ術ヲ伝習セシヲ切望シタレ臣能ハス十六日ニ及ンテ（十四日ヨリ十六日迄僅々二日間ヲ待ツヲ殆ト数十年ヲ待ツノ思ヲナセリト其切望想察スルニ足ル）モンニッキ氏ニ就キ親シク種痘法ヲ伝習セリ其伝習ノ為メモンニッキ氏ハ自ら手下シテ和蘭通詞加福喜十郎ノ男喜一氏ニ殖接セシニ右腕ニ於テ只一個ヲ発セシノミ（此際吉雄氏ハ其看護ノ為メ三日間始ト睡ヲナサスト云フ）是レ我国種痘法伝習ノ濫觴ニシテ寔ニ同月十六日ノ事也如此幸ニ感殖セシニ由リ吉雄氏ハ廿四日ニ至リ親戚ナル内田九一及ヒ其妹菊（今共ニ死ス）ニ接種法ヲ行シニ亦能ク感應セリ是ヲ以テ氏ハ啻此ノ種痘法ノミナラス諸泰西医術ノ精妙ナル可ヲ思ヒ益々志ヲ不拔ニ置キ且我國種痘法ヲ伝習シ其術ヲ実施スルノ嚆矢タルヲ喜ヒ愈々志ヲ大ニシ術ヲ広メ普ク蒼生ノ夭折ヲ免レ天賦ノ美貌ヲ完全セシメンヲ思ヘリ（氏ノ歳于時廿七歳始テ妻ヲ迎フ当明治十五年六十一歳其壯康衆ニ抜ンテ尚刀圭ヲ以テ其名四方ニ鳴ル）此時ニ当テヤ平素熱心スル諸氏既ニ其船載アルヲ聞キ或ハ郷里ヲ去リ夜以テ日ニ繼キ長崎ニ来リ該術ヲ伝

モ一ニケから直接牛痘種痘法の伝授を受けた楢林宗建は嘉永五年に、柴田方庵は安政三年に他界しており、有田論文の発表された明治十五年には、ひとり吉雄圭齋のみ健在であった。現存当事者の文書の尊重せられるのは当然であり、とりわけ圭齋がアメリカ軍医に日本の牛痘種痘の初まりを知らせた返書は重視されたものと思われる。

有田論文の影響はつぎのような形で現われた。

郭嘉四郎は明治十五年に発表した論文⁽⁷⁾の中では、『牛痘苗ハ嘉永己酉(二年)八月和蘭醫モンニツキ氏始テ載セテ長崎ニ至ルト云フハ確實ナル説ニシテ又世人ノ熟知セル所ナリ』と述べているにも拘らず、明治二十年にはその著「皇国医事沿革小史」⁽⁸⁾の中で、『嘉永元年(紀元二千五百〇八年、諸書ニ嘉永二年八月トアルハ誤ナルヨシ)六月和蘭ノ商船長崎ニ来リ蘭醫ドクトルモンニツキ又牛痘ノ痂ト漿トヲ齎ラス時ニ長崎ノ人吉雄圭齋モンニツキニ就キ其術ヲ伝ヘンコトヲ乞フ乃チモンニツキ自ラ手ヲ下シ和蘭譯官加福喜十郎ノ子某ニ殖接シテ之ヲ示ス圭齋豁然得ル所アリ其族内田九一等ニ施シ良驗ヲ得タリ(此時モ亦痘漿ハ其効ナクシテ痂苗特リ感染シタリト云フ)是レ実ニ我邦ニ於テ種痘法伝習ノ嚆矢トス圭齋既ニ種痘術ヲ得テ思ヘラク我邦古来痘瘡流行ノ為メ無上ノ愛児ヲ奪ハレ天然ノ美貌ヲ損スル者幾多ゾヤ苟モ我此術ヲ普ク施セバ以テ之ヲ救済スルニ足ラント志ヲ執ル益々固ク其普及ニ勉ムルニ汲々タリ』と記している。この記述が有田論文に準拠したものであることは一見して明らかである。

因みに、同書は林洞海⁽⁹⁾校閲となっている。

富士川游は明治二十八年、「皇国医事沿革小史」中の前記部分を引用した後、『吉雄氏が嘉永元年ニモ一ニツケヨリ種痘術ヲ得タリト云フハ果ソ事實ナルヤ否ヤ尚詮索スベシ』と述⁽¹⁰⁾べ、これを将来の研究にゆだねている。

角倉賀道は明治二十八年その著「種痘全書」⁽¹¹⁾の中で、『嘉永元年(一書ニハ嘉永二年八月)六月ニ至リ蘭醫モンニツキ氏牛痘漿及ヒ牛痘痂ヲ携ヒ商船ニ投シテ長崎ニ渡来セリ是即我カ邦種痘伝播ノ濫觴ニシテ長崎ノ人吉雄圭齋氏(後召サレテ陸軍一等軍醫トナリ昨年四月病没享年八十有余)先ツ就テ伝習シ東奔西走大ニ斯業ノ發達ニ尽セリ』と述べている。

鈴木要吾は昭和八年、その著「蘭学全盛時代と蘭疇の生涯」⁽¹²⁾の吉雄圭斎の項で、有田論文の論拠として筆者がさきに抄出したその前半を吉雄圭斎手記として紹介した後、続けて『：嘉永元年伝来の牛痘は不感応に終らず日本に移殖されたと見える、長崎市役所編、中にも元年とある、が同年の牛痘は失敗に終り翌嘉永二年再びモンニツキのもとに齎らされた牛痘が始めて好結果を得た「長崎と海外文化」という事は日本醫學史(富士川博士)や日本年表などの示す処であり、種痘の始祖や功績者達の記録中にも凡て嘉永二年渡来となっている。吉雄圭斎の手記(完全な記録に非ず覚え書式に一枚の紙に書き散したもの)中にはモンニツキ翌二年正月貢物献上の為参府し同年三月長崎表に帰り同年九月廿日長崎を出帆して帰国している⁽¹⁴⁾。此事から考ふれば二年は日本に在留し同年渡来の種痘が始めて成功したのかも知れないが、これは後日確証の上研究する価値があるものと思う：』と述べている。

その後、有田論文を取り上げ、特に痘苗活着年について論考したものをみないが、嘉永元年に長崎にもたらされた痘苗が活着したか否かはわが国の種痘史上ゆるがせにできない問題である。それで、今回有田論文をあらためて紹介し、その影響を伝えると共に痘苗活着年について若干の調査を行なったのである。

嘉永元年舶来痘苗の活着を裏付ける史料

まず、有田論文以外に、嘉永元年舶来痘苗の活着を裏付ける史料があるか否かを調らべた。

松尾耕三は、その著「近世名醫伝」⁽¹⁵⁾の高橋春圃の項で、『至嘉永元年秋。聞蘭人門尼幾来于天草島傳種痘法。大喜。是可躋斯民於壽域矣。乃請郵券航天草。至則門尼幾既去。寓長崎。乃尾而赴焉。留数月。得其法而歸。頒痘苗於同業者。相俱大施之國中。』と記している。

また、呉秀三は、その著「シーボルト先生 その生涯及び功業」⁽¹⁶⁾の高橋春圃の項で、松尾耕三の述べた前記部分をそのまま和訳、紹介している。すなわち、高橋春圃は、嘉永元年長崎に数日間滞在して種痘法を伝習して帰えり、痘苗を同業者

に類ち、ひろく種痘したと紹介しているのである。

これであれば嘉永元年に、痘苗は活着していなければならぬ。

ところが、高橋春圃については同郷の山本昇・湯治万蔵による評伝「高橋春圃」および小伝「高橋春圃先生伝」⁽¹⁷⁾があり、そこには『嘉永二年秋ナラン、春圃仄カニ、一蘭医ノ天草島ニ来リ、種痘法ヲ実行スル者アリト聞き、即日、旅装ヲ整ヘテ天草ニ赴ク、実ニ瞬間ヲ失ハズ。其熱心、俊捷、殆ド類ヲ見ズ』と記されている。

従つて松尾、呉の記載は嘉永元年舶来痘苗の活着を裏付ける史料とはなり難い。

つぎに、「近世名醫伝」調査の折、たまたま小川鼎三博士から、「宮崎市在住の田代逸郎氏所蔵の「種痘人名録」の冒頭に、嘉永西初春上旬モーニッケから伝授を受けて宮崎に帰えり種痘したと記してあり、これに続いて三月六日からの種痘人名が書かれてあるのを見、三月六日が嘉永二年とすれば定説と合致せず不審に思ったことがある」との御話があった。

そこで、田代逸郎博士から、「種痘人名録」のほか、「年代実録」、「福島退庵履歴抄」などの写しを送付して頂いた。そして、「年代実録」⁽¹⁸⁾中の種痘関係記事などを参考にして調らべた結果、「種痘人名録」の初めに書かれている三月六日の日付は福島退庵・若山健海が日向で最初に牛痘種痘を行った嘉永三年の三月六日であると判定した。

その後、今日まで嘉永元年舶来痘苗の活着を裏付け、あるいはそれを思わせるような史料には出会っていない。

嘉永元年舶来痘苗の活着を否定する史料

つぎに、嘉永元年舶来痘苗の活着を否定する史料を見ることにする。

その第一にあげべきものは楢林宗建の著「牛痘小考」⁽¹⁹⁾である。本書は、オランダから牛痘苗を取寄せることを鍋島直正に上申して容れられ、レフイソンにこれを依頼し、またモーニケに痘痂を輸入するよう意見を述べ、ついに活着痘苗の

輸入に成功した当事者楢林宗建の著作である。

ただし、首題に関する楢林の記述は簡潔であつて、モーニケとの問答の中で『今汝ガ齋ン来ル耽ノ者モ亦然ルハ何ゾヤ』と述べているにすぎない。(文中、「今」は嘉永元年を、「汝」はモーニケを、「亦然ルハ」は活着しないことを指す)。それで、さらにこれを傍証する史料が望まれる。

明治二十九年東京で行われたジェンナー種痘發明百年紀念会に楢林榮叔が出品した「牛痘舶来の記」⁽²¹⁾には、嘉永元年六月十五日モーニケが持参した牛痘液は『通詞役ノ二児(九才十一才未タ天然痘ヲ感セサル者)ヲ撰ヒ』商館で種術したが一つも萌生しなかつたと記され、明治三十一年師井榮倫が著した「本邦牛痘苗輸入之始祖楢林宗建先生小伝」⁽²²⁾の中にも同じように、『之ヲ和蘭陀通詞某々ノ二児ニ試ミルモ感染セザリシ』と述べられている。

古賀十二郎は「長崎洋学史」⁽²³⁾の中で、『楢林氏は、蘭通詞末永栄助の児、(末永氏は、弘化四丁未年六月六日逝去した。)及び蘭通詞西慶太郎(のち直方と改む)の児、兩人を選みて、出島の蘭館に伴ひゆき、ドクトル・モウニケに請ふて、種痘を施してもらふたが、両児とも、一つとも萌生しなかつた』と述べている。しかしながら、古賀は「嘉永二巳酉年牛痘接種の顛末に関する文書記録は、いろいろあるが、楢林宗建の自筆に係るものは、一つも遺存していない。今猶ほ遺存せるものは、後に記された者と思はれる。これらの文書記録は、時日往々一致せず、いづれが正確なるか、決し難い場合がままある」と記している⁽²⁴⁾ので、嘉永元年に舶来した痘苗の接種顛末についても同様であつたかも知れない。それで、筆者は前記の通詞氏名を記した文書を見たいものと考えた。

この件について中野操博士に御教示を仰いだところ、該文書については不明という他ないが、「柴田方庵日録」の嘉永元年七月十七日の条に、加福、楢林児に蘭医が牛痘を種痘したと記している旨の返書を頂戴した。

柴田方庵は、吉雄圭齋と共にモーニケから直接牛痘種痘法の伝授を受けた人であり、「人となり正実にして、事を処すること周密なり」と評され⁽²⁵⁾、またその日録⁽²⁶⁾は天保二年辛卯四月から安政三年丙辰に至る四半世紀にわたり方庵自身が誌し

たものである。

それで嘉永元年七月の方庵日録を読んでゆくと、

十四日 晴

十五日 晴

十六日 晴

十七日 晴

十八日 晴

十九日 晴

廿日 晴

廿一日 少曇

廿二日 晴

廿三日 晴

廿四日 晴

廿五日 雨

廿六日 雨

とあり、その後は種痘関係の事項は書かれていない。

唐船壹艘入港 幼稚淨瑠璃催しニ付引田屋案内行
夜九ツ半過頃帰宅 御家老清水挑藏殿御用七ツ時行

十七日朝加福檜林児
蘭医牛痘ヲ種痘ス

加福小児種痘見舞廿三日熱発ノ期也

すなわち、方庵は牛痘種痘翌々日の七月十九日から二十五日まで七日間天候のほかは何も記していない。これは方庵が二十三日には活着の結果がでるものと期待し、加福の子息を連日見舞い検診したが、ついに無反応に了ったことを物語っているのではないだろうか。嘉永二年七月以降の日録には度々種痘に関する記載が見られるのみならず、その後の種継につ

いても記されていることと併せ考え、この考察は妥当と思ふのである。

右にあげた方庵日録の記載は、嘉永元年舶来牛痘苗の活着を否定する有力な一史料ではなからうか。

つぎに、堤可厚博士がインドネシアで入手して下さった一八五〇年(嘉永三)一月五日付の *Javasche Courant* ⁽²⁷⁾ を見ることにする。同紙には、一八四九年(嘉永二)十二月十三日に日本からバタビア港に到着した商船 *Stad Dordrecht* 号の船

長 *J. van Nassau* がもたらした日本情報載っており、第二面に、モーニケが日本に赴任する時携行したウィーン製の牛痘苗は活着しなかつたけれども、今回同船が日本に運んだ牛痘苗 (*Pokroven*) の活着したことが詳しく報ぜられている(今回と云うのは嘉永二年)。新聞記事ではあるが、これもまた嘉永元年舶来牛痘苗の活着を否定する一史料であらう。

結 び

有田論文は、長崎県人有田樹林が、長崎に牛痘苗が舶来した当時の事情を生存関係者にも会って調査し、わが国における種痘の始祖を明らかにしようとして書かれたものである。

筆者は、その中で嘉永元年にモーニケがもたらした痘苗が活着したとする記述に特に注目した。それは、わが国の種痘史の上できわめて重要な意味をもつからである。⁽²⁸⁾

そこで、今回あらためて有田論文を取りあげて紹介し、その影響を述べると共に、牛痘苗活着年について若干の調査を行った。

しかし、嘉永元年舶来痘苗の活着しなかつたことを裏付ける有力な史料は見いだし得たが、嘉永元年舶来痘苗の活着を裏付ける史料は見いだし得なかつた。

終りにのぞみ、貴重な御教示を賜った中野操、小川鼎三の両先生、史料入手について御高配頂いた堤可厚、鹿子木敏範、田代逸郎の諸博士、文献解説に御協力頂いた杉森正、岸浩の両博士に心から御礼申し上げます。

文献ならびに注

- (1) 舶来した痘苗が活性をもつていて善感した場合、仮りにこれを「活着」と称んでおく。
- (2) 高田春耕 種痘三祖ノ記念碑ヲ東京ニ建設セシムヲ議ス 東京医事新誌 二一六号 一〇一—一四(明治一五)
- (3) 郭嘉四郎 日本種痘家ノ祖トハ誰ソ 東京医事新誌 二二〇号 一〇一—一五(明治一五)
- (4) 高田春耕 種痘始祖ヲ長崎県ノ医士諸君ニ質ス 東京医事新誌 二二六号 一七一—一九(明治一五)
- (5) 菊地武文 文政年間ノ種痘家 東京医事新誌 二二七号 一二—一四(明治一五)
- (6) 肥前佐賀の医者で名は煥、邱浩川の著書「引痘略」を校正し、弘化三年(一八四六)に刊行している。
- (7) この文章では、嘉永二年にモーニケが牛痘苗を持参して長崎に来たようにも解される。中野禮四郎編纂「鍋島直正公伝」(大正九)三七一ページにも同様に記されている。
- (8) 郭嘉四郎編纂「皇国医事沿革小史」(後編)四五(明治二〇)
- (9) 林洞海は天保末年大石良榮とはかり、高島四郎太夫に託してオランダから痘苗を輸入して種痘を試み、また後年江戸に種痘所を創立する際の発企人の一人であった。校閲時、林は数え七十四歳。
- (10) 富士川游 種痘術ノ祖ノ私考 中外医事新報 三三八号 四九二—四九六、三三九号 五五八—五五九(明治二七)
- (11) 角倉賀道「種痘全書」二四—二五 東京牛痘館(明治二八)
- (12) 鈴木要吾「蘭学全盛時代と蘭疇の生涯」二五三—二五五 東京医事新局(昭和八)
- (13) これは、長崎市役所編集「長崎と海外文化」(大正一五)三六一—三七七に『嘉永元年(一八四八年) Dr. Otto Mohrnik が来船した。彼は牛痘を我邦に伝へ、今日一般に行はれている種痘術の基礎を強固に横へた。長崎の榎林宗建、吉雄圭齋などがモーニケに就いて種痘術を修め、尋いで種痘術が長崎より諸国へ伝播したことは日本醫學史上特筆すべきことである。』とあるのを指すものと思われる。
- (14) モーニケの帰国した年については、中野操著「日本医事年表」には嘉永四年(一八五一)九月、橘輝政著「日本医学先人伝」には嘉永五年(一八五二)となっている。
- (15) 松尾耕三「近世名醫伝」巻之三 廿一枚目 香草園蔵版(明治一九)
- (16) 呉秀三「シーボルト先生 その生涯及び功業」第三巻 七〇—七二 東洋文庫(昭和四三)
- (17) 山本昇・湯治万蔵「高橋春圃先生伝」一五 西原村公民館(昭和四二)

- (18) 安山松巖「年代実録」七五 都城市立図書館(昭和四九)
- (19) 榎林潜宗建「牛痘小考」一枚目 得生軒藏(嘉永二年歲次巳酉孟冬下澣崎陽福地載世撰の序文のあることから嘉永二年発行とされている。
- (20) 榎林栄叔は分家榎林氏の第六代。天保十二年辛丑十月十五日誕生故、本史料提出時は数え五十六歳。
- (21) 「牛痘舶来の記」榎林栄叔出品 善那氏種痘発明百年記念会報告 一四五—一四七(明治二九)
- (22) 師井栄倫「本邦牛痘苗輸入之始祖榎林宗建先生小伝」(渡辺庫輔「崎陽論攷」九六 親和銀行済美会 昭和三九 より引用)
- (23) 古賀十二郎「長崎洋学史」(下巻)三二七 長崎文献社(昭和四二)
- このほか、大槻如電原著・佐藤栄七増訂「日本洋学編年史 五一—八 錦正社(明治一〇・昭和四〇)にも末永栄助、西慶太郎児に接種したと述べている。
- (24) 「長崎洋学史」下巻 三二八—三二九
- (25) 「シーボルト先生 その生涯及び功業」第三巻 九九 東洋文庫(昭和四三)
- (26) 蘭医柴田方庵先生日録 第一冊(自弘化二乙巳正月〜至嘉永元九月) 武田科学振興財団所蔵(藤波剛一旧蔵)
- (27) Javascbe Courant 1850, No. 2, Zaturdag, 5 January: 「本邦牛痘苗輸入之始祖榎林宗建先生小伝」に、嘉永二年にもたらされた痘苗はモーニケが宗建と熟議して『本国ニ謀リ、未痘児三名ヲ瓜哇迄伴ヒ、炎天ノ土地即チ赤道直下ヲ通過スル片、右ノ未痘児一名毎ニ順次三名ニ種統キ、以テ瓜哇ニ着シ、同所ニ於テ右ノ痘痂并ニ膿漿ヲ採リ、然ンテ本邦ニ致セシモノナリ』と括弧内に書いているが、新聞記事として恰好の材料であろうこのようなことは本紙には述べられていない。(一八〇三年にスペイン政府が未痘児を船に乗せて継痘しつつ、小呂宋から澳門に至り支那に牛痘苗がもたらされたことはよく知られるところであるけれども)。
- (28) 長崎医学百年史(昭和三六)においても、この点明確にされていない。(同書第一章一五一—一六ページと、附録(四)の五ページの記事を対比されたい。)

Was the vaccinia virus, which was introduced into Japan by Dr. Otto G.J. Mohnike, used for vaccination in Japan ?

Masao SOEKAWA

Sōken Narabayashi (1802-1852), who asked his lord, Naomasa Nabeshima, to introduce vaccinia virus into Japan from the Netherlands and succeeded in its introduction, published a book entitled "Gyuto-Shokoh" (Guidebook of Vaccination) in 1849.

In this book, he noted the following:

Dutch physicians, who came to Japan and were stationed at Dejima, Nagasaki as Captains, had tried many times to introduce vaccinia virus. However, their endeavors were in vain. Otto Gottlieb Johann Mohnike, who arrived at Nagasaki in 1848 also tried to vaccinate Japanese with the vaccinia virus he brought, but the virus caused no eruption. Thereupon, Sōken told Mohnike that scabs were preferable in Japan for variolation, because scabs were effective even after several months' storage. He advised Mohnike to try the introduction of scabs instead of lymph, also in case of cowpox.

In the next year, 1849, vaccinia virus arrived in the form of scabs at Nagasaki (from the Netherlands via Batavia) and three children were inoculated by Mohnike. One vaccinal eruption

appeared on the arm of one of the inoculated children. Using the derived pustule, three children were inoculated; in this way the virus was further passed on among children and it was gradually distributed in various parts of Japan... (The words in parentheses are a comment by M.S.)

In 1882, Jurin Arita published a paper concerning the first vaccinator in Japan. In this paper, Arita presented the manuscript of Keisai Yoshio (1822-1894), who was present when Mohnike vaccinated the son of Kijūro Kafuku (an interpreter). According to his manuscript, the vaccinia virus brought by Mohnike in 1848 was effective, and it was distributed in Japan.

The paper of Arita caused some embarrassment to those who were convinced that the first introduction of active vaccinia virus had been in 1849. The author considers that the question of whether the vaccinia virus introduced in 1848 was active or not should be resolved. This paper deals with the results of an investigation conducted by the author on a small scale.

Firstly, he sought documents which prove the efficacy of the vaccinia virus introduced in 1848:

In two biographies of Shumpo Takahashi (1805-1868) there was a description which appears to indicate that the vaccinia virus introduced in 1848 was active, but this was denied by another comprehensive biography of Shumpo Takahashi which was edited by persons from the same province, Kumamoto.

Next he sought documents which deny the activeness of the vaccinia virus in 1848:

In the diary of Hōan Shibata (1800-1856), Hōan wrote that Kafuku's child and Narabayashi's were vaccinated by a Dutch physician in the morning of the 17th of July, 1848. Thereafter, Hōan

wrote about nothing but weather until the 25th of July. These blanks appear to indicate that no reaction was observed in the vaccinated children.

In the Javasche Courant 1850, No. 2, Zaturdag, 5 Januarij, it was reported that the vaccinia virus in 1848 was inactive, but the one which arrived in 1849 was active and it was used for vaccination in Japan.

The author could not find documents which proved the activeness of the vaccinia virus in 1848, but he found documents which denied its activeness.